

遺書

與謝野晶子

青空文庫

一

私にあなたがしてお置きになる遺言と云ふものも、私のします
其れも、權威のあるものでないことは一緒だらうと思ひます。で
すからこれは覚書です。子供の面倒を見て下さる方かたにと思ふので
すが、今の処ところ私の生きて居る限りではあなたを対象として書くよ
り仕方がありません。私は前にも一度こんなものを書きました。
もうあれから八年になります。花樹はなきと瑞樹みづきの二人が一緒に生れて
来る前の私が、身体からだの苦しき、心細さの日々にちくに募るばかりの時
で、あれを書かなければならなくなつたのだと覚えて居ます。十

二月の二十五日の午後から書き初めたのでした。今朝は耶蘇降誕祭スのおくりものの贈物ひかるしげるで光と茂の二人を喜ばせて、私等二人も楽しい顔をして居たと確か初めには書いたと思つて居ます。その時のも覚書以上の物ではありませんし、唯たゞ今と同じやうにあなたの見て下さるのに骨の折れないやうにと雑記帳へ書くこともしたのでしたが、今よりは余程瞑想的な頭が土台になつて居ました。あなたの次で結婚をおしになる女性に就いていろ／＼なことを書いてありました。数人の名を挙あげて批判を下したり、私の希望を述べたりしたのでした。思へば思ふ程滑稽な瞑想者でした、私は。瞑想は下らないものとして、あなたに儼せんじやう上を云つたものとして、併しかしながらあの時にA子さんやH子さんのことをあなたの相手として考へ

たやうに、今も四人や五人はそんな人のあつた方が、この覚書を
読んで下さる時のあなたを目に描^かいて見る私にも幸福であるやう
に思はれます。あの方^{かた}よりさう云ふ人を今のあなたは持つておい
でにならない、あの方^{かた}は私が見たこともなし、委細^{くは}しい御様子も
聞いたことはありませんけれど、近年になりまして私が死んだ跡^{あと}
のあなたはどうしてもあの方^{かた}の物にならない、私の
子を世話して下さる人はあの方^{かた}よりないと云ふことがつきりと、
余りにはつきりと私に思はれて来ました。自分の死後の日を見廻
す中にも、私は傷^{いた}ましくてその絵の掛つた方は凝視^{はう}することが出
来ません。私は冷く静かな心になつて居ると思つて居ながら、あ
なたの苦痛のためにはこれ程の悲しみを感じるのかと自ら呆^{みづか}れま

す。あの方^{かた}はあなたの初恋^{かた}の方^{かた}で、然^{しか}も何年か御一緒にお暮しになつた方^{かた}で、あなたのためにその後^{のち}の十七八年を今日^{けふ}まで独居しておいでになる方^{かた}であつても、悲しいことにはあなたよりもつとお年上なのでせう。去年あの方^{かた}のお国から出ておいでになつた岩^{いはき}城^{はき}さんが、私等夫婦をもすこし開^あけ広げな間柄であらうと思ひになつて、あの方^{かた}のことをいろ／＼とお話しになつた時に、年は自分よりも確か二つ三つ上だと云つておいでになりました。岩^{いはき}城^{はき}さんはあなたよりまた二つ三つ上なのでせう、であつて見ればあの方^{かた}の髪にはもう白い毛が出来て居るでせう、お目の下の皮膚から紫色になつた血^すが透^すいて見えるでせう。真^{ほん}実^{たう}にあなたは可^か哀^{あい}相^{さう}です。あの方^{かた}のことをあなたが私へお話

しになつたことは唯^{ただ}一度しかありません。結婚して一^{ひと}月も経たない時分でした。つまりお互^{たがひ}に自己の利益などは考へ合はなかつた時だつたのです。ですからあなたは虚心平気でいらつした。昔の恋人のためにしみじみとお話しました。けれどその晩を私は一睡もようしないで明^{あか}したことを覚えて居ます。

二

あの××県のあなたの兄^{にいさん}様の拵^{こしら}へておいでになる女学校を、神童時代の次の十八九のあなたが教えておいでになる時、其^{そこ}処^この舎監で、軍人の未亡人の切下げ髪の人とかが、毎夜毎夜提灯^{とも}を点

して遠いあなたの住居を訪ねて来て、あなたを挑まうとしながら表面では学校のあの二人の才媛の何方をあなたは未来の妻にしたいと思ふかなどと云ふ話ばかりをして居たと云ふこと、あなたは第一の才媛は容貌が悪いから厭だ、あの人ならとあの方のことをお云ひになつたのだと云ふこと、京の北山の林の中へ鉄砲を持つて入つて、あの方と添はれない悲しみに死なうとなすつたと、それから五六年もしてあなたとあの方が一緒になつて、女の赤さんを生んで、そしてその子が死んでからお別れになつた時、あの方は大きい柳行李に充滿あつたあなたの文がらをあなたの先生の処へ持つて行つて焼いたと云ふこと、こんなことでした。私が何故別れるやうになつたのでせうと云ひましたら、赤坊

の死んだのが悪かつたのだとあなたは云つておいでになりました。年上の女と恋をするのはどんな気持なものかとも私がお尋ねしましたら、綺麗な人だつたせいaka自分は年上とも思はなかつたとあなたは訳なしに云つておいででした。よくあなたや私の知つた人が、年上の女を娶つたり、年下の男の処へ行つたりするのを見て何故ああした氣になれるだらうとあなたはよく不思議がつておいでになりました。私は何時も昔のあなたがお思ひになつたやうに年としと云ふものの目に映つて来ない幸福な氣に包まれた人達なのであらうと、さう云ふ人達に対しては思つて居るだけなのです。あの方が何年間かのあなたの心を蓄へた行李を開けて人に見せ、焼き尽しもした程憎みを見せながらそのあなたの弟や妹に、実姉妹

のやうな交際を猶なほ続けて来て居ることは三四年前まで私は知りませんでした。あなたは私よりもつと後あとまでお知りにならなかつたかも知れません。知つておいでになつたかも知れない。或あるひはまた西洋においでになる時にも門司もじでお逢ひになつた妹さんの口から何事もあなたへ伝へられなかつたかも知れません。私はお艶つやさんとあなたのお留守に一月程ひとつき一緒に居ました時、お艶つやさんは私を苦くるめたいのでもなく、何なにの気なしによくあの方かたのことを賞ほめてお聞かせになりました。烈はげしいヒステリーの起つてゐる時などは、悲しい程にさうでした。あなたの兄上あによめや嫂の君の信用の最も厚い婦人と云ふのはあの方かたであるとも聞きました。私が幾人も残して行く子供を育て、下さるであらうと依頼心をあの方かたに起おこすやうに

なつたのもお艶つやさんの言葉が因いんになつて居るのです。岩城いはきさんが某氏のちぞひの後添かたにあの方かたを世話しやうかと思ふと云つておいでになつた時に、私は滑稽なことを云ふ人であると思つて笑つたのですが、あの時はあなたも傍そばにおいでになつて、私がさも心から嬉しげに笑つたとは思ひにならなかつたでせうか、私はあなたのその時の顔をよう見ませんでしたけれど。

私は子供のことばかりを書いて置かうと思つたのですが、前に書いた遺書のことから云はないでもいいことを書きました。

私が今日またこんな物を書いて置かうと思ひましたのは、花樹はなきと瑞樹みつぎが学校へ草紙代や筆代で四十六錢づゝ持つて行かねばならないと云ひまして、前日先生のお云ひになつたことを書いて来た物を持つて来て見せました時、私が居なくてこの子等がこんな物を見せる人がなかつたならと、ふとそんな気がしまして、そんな事などをお頼みする物を書かうと思つたのでした。私は今また遺書ではありませんが、四五年前に死を予想して書いた物のあつたことをふと思ひ出しました。それは私が亡霊になつて家へ来ることにして書いたものでした。

東紅梅町ひがしこうばいちやうのあの家は書齋も客室きやくまも二階にあつたのでした。階下したに二室ふたま続いてあつた六畳わかに分れて親子は寝て居ました。

亡霊の私が出掛けて行くのは無論夜の夜中よるよなかなのです。ニコライのドオムに面した方はうの窓から私は家の中へ入ると云ふのでした。私は何時いつも源氏の講義をした座敷の壁の前に立つて居ました。青せいぎ玉よくのやうな光が私の身体からだから出て、水の中の物がだんだんと目に見えて来ると云ふ風に其処等そこらがはつきりとして来ると云ふやうなことは、私が書かうと思つたことではありません。私はやつぱり電気灯のスイッチを廻して座敷の真中まんなかへ灯ひを点つけました。室へやの中は隅々まで綺麗になつて居ました。私は昼間階下したの暗いのに飽あいて二階へ上あがつて来て居る子供等が、紙片かみきれや玩具おもちゃの欠片かけら一つを落してあつても、

「この穢きたないのが目に着かんか。」

とお睨み廻しになるあなたの顔が目に見えて身慄みぶるひをすると云ふのです。または自身達の散ちぢして置いた塵ちりでなくても、

「この埃ほこりが目に見えないのか。」

と子供等は云はれたであらう、梯子のぼ上りにだんだん怒いかりが大きくなつて来るあなたは、終しまひには縮ちぢ緬めんの着物を着た人形でも、銀ぎんの喇叭らつぱでも、筆さやの莢さやを折るやうにへし折つて縁側から路次へ捨て、おしまひになるやうなこともあつたに違ひないと思ふと云ふのでした。床の間は何時いつ来て見ても私の生きて居た日に少しの違ひもない品々の並べやうがしてあると云ふのです。唯ただ私の詩集が八冊程花瓶はながめの前へ二つに分けて積まれてあるのだけは近頃からのことであると思ふと云ふのです。本の彼方あちこち此方には白い紙が

栞しおりのやうにして挟はさんであると云ふのです。本の上には京の茅野ちのさんの手紙が置いてあるのです。私は全集に就いてして呉れた茅野ちのさんの親切な注意をよく読んで見たいと思ひながら遅くなるからと思つてそれは廃やめると云ふのです。また私は詩集の中がどんな風に整理されてあるのか見たいと思ふのですが、自分がどうすることも出来ないものであるから仕方がないと諦めます。併しかしさう思つてしまへば、子供を見るためにかうして時々この家へ来ると云ふことも同じ無駄なことであらうと苦笑するのです。私の作さくぶ物ぶつには生んだ親である自分にも勝まさつた愛を掛けて呉れる人達たが少すくくも幾人かはある。私の分身の子には嚴しい父親だけよりない、さうであるからなど、恥はづかしい気もありながら思ふのです。最初に

は気が附かなかつたのですが、柳箱やなぎばこの上に私の写真が一枚置いてあるのです。何処どこかの雑誌社から返しに來たのであらうと思ふと云ふのです。

四

今日けふはもう書齋へは入はつて見ないで置かうと私は思ふのです。死ぬ少し前まで一日のうちの八時間は其処そこで過すごして、悲しいことも嬉しいことも其処そこに居る時の私が最も多く感じた処ところなんですから、自身の使つて居た机が新刊雑誌の台になつたりして居る變り果てた光景は見たくないからなのです。併しかし階下したへ降りるには其そ

処こを通つて梯子口へ出なければならぬと思つて、また自分は亡
 霊であるから梯子段などは要らないと非常に得意な気分になつて、
 階下したへすつと抜けて入るのはひです。

子供の寢部屋には以前の二燭光よりは余程明るい電氣灯が点つけ
 られてゐるのです。子供は淋しがらせたくないあなたの心持を私
 は嬉しく思ふのです。処ところでね、蚊帳かやの中には寢床が三つよりない、
 光と茂ひかるしげると、それから女の子が一人より居ません。亡霊の胸は轟とろろき
 ます。どうしても三つよりない。然しかも一つの寢床には確かに一人
 づゝより寢て居ません。寢て居る方はうは瑞樹みづきなのであらう、居なく
 なつたのは花樹はなきであらう、花樹はなきは美濃みのの妹が来て伴つれて行つたの
 であらうと私は直すぐそれだけのことを直覺で知ると云ふのです。

三郎が京の茅野ちのさんの処ところへ行つてからもう十五日になる、花樹はなきは何時いつ行つたのであらうなど、考へながら私は引き離された双生児ふたごの瑞樹みづきの枕まくら許もとへ坐ります。大人ならば到底眠れないだけの悲痛おとな音がこの子の心臓に鳴つて居る筈はずである、どんなに瑞樹みづきさんは悲しいだらう、双生児ふたごと云ふものは普通人の想像の出来ない愛情を持ち合つて居るもので、まだ生れて四五月目から泣いて居る時でも双方の顔が目に映ると笑顔を見せあつたあなた達ですね、けれどあなたの方ほうが幾分か両親に大事がられたので、妹になつては居るのだけれど姉のやうな心持で双生児ふたごの一人を庇かばふことを何時いつも何時いつも忘れませんでしたね、大抵の病氣は二人が一緒にしましたね、さうさう下した向むきに寝返ねがへりを仕初めたのも這ひ出したのも

一緒の日からでしたね、牛乳を飲む時には教へられないのに瓶を
 持ち合つて上げましたね、あなた方はね、世間の双生児には珍ら
 しい一つの胞衣えなに包まれて居たのでしたよ、などとこんな話を口
 の中でした瑞樹みづきの顔を覗のぞかうとするのでしたが、赤いメリンスの
 蒲団に引き入れた顔は上を向き相さうにもないのです。泣きながら寝
 入つたことがよく解わかるのです。枕の前には硝子ガラスの箱に入つた新し
 い玩具おもちゃが置いてあるのです。花樹はなきもこれと同じのをお父様とうさんに
 買つて頂いて行つたのであらうと私は思ふのです。蒲団から出し
 て居る瑞樹みづきの手の掌てのひらには緋縮緬ひぢりめんのお手玉が二つ載つて居るので
 す。私が五つ拵こしらへて遣つて置いたのを、花樹はなきに三つ持たせて遣やつ
 たのであらうと私は點頭うなづくと云ふのです。大胆な茂しげるの顔にも少し

瘦^{やせ}が見えて来たと哀れに思ひながら見て、私は一番端に寝た光^{ひかる}の
寝床へ行く^ゆのです。苦しい夢でも見て居るやうに、光^{ひかる}の眉の間に
は大人のやうな皺が現はれたり消えたりするのです。私は物が言
ひたいと長男の胸を抱いて悲しがるのです。

「光^{ひかる}さん。」

とだけでいゝ、唯^たそれだけでいゝ、もう永劫にこの子等を見
に来られないことになつてもいゝ、今夜の今、

「光^{ひかる}さん。」

と云つて、この子を眠^{ねむり}から醒^{さま}させたいと遣瀬なく思ふのです。

そのうち光ひかるがのんびりした寝顔になるのを見て、私の心はだんだんその美に引き入れられながら、何と云ふ綺麗な子であらう、私はこんな美しい物を見たことがない、生きて居た日にはもとより、天上の果てから地の底までも見ようと思つて歩いている今でさへも見ることにない美しさであると思ふのです。私は渋谷の丘の上の家で、初めて自分の分身として光ひかるを見た時の満足にも劣らない満足さを感じるのですが、やはりあの時のやうに目を開あいて居ない、真紅まつかな唇は柔かく閉とぎされて鼻の側面が少女のやうである、この子を被おほふのには黄八丈きはちぢやうの蒲団でも縮緬ちりめんでもまだ足るものとは思はないのに、余りに哀れな更紗蒲団さらさであるなど、思ふので

す。白い掛襟ほころの綻びほころの繕くやはれてないのも口惜くやしいことに思はれるのです。光ひかるの枕まくらもと許もとには大きいリボンを掛けた女の子を色鉛筆で描かいた絵葉書が作られてあるのです。

瑞樹みづきちゃんきは昨日きのふも今日けふも花樹はなきちゃんに逢あひたいとばかり云つて泣いて居ます。花樹はなきさんがこの絵のやうな大きいお嬢さんになる時分には、兄にいさんも大きくなつて居て一人で汽車に乗つて迎へに行つて上げますよ。兄にいさんの上げた林檎は汽車の中で食べましたか。

など、仮名で書いてあるのです。表の宛名はまだ書いてありません。

私はあなたの蚊帳かやの中へもすつと入はいりました。三郎の寢床がな

くなつてからのあなたの蚊帳かやの中の様子は海の中に唯一たゞつある島のやうであると思つて、この前と同じやうな淋しさを私が感じる
 と云ふのです。此処ここの電気灯も十燭光位が点ついて居るのです。私は
 三度程ぐるぐるとお床とこを廻つてから恥はづかしいものですから背中向
 きにあなたの枕まくらもと許へ坐るのです。亡霊になつてからまだあな
 たのお顔だけはしみじみと見たことが初めの一度きりしかないの
 です。そしてまたこれが出してあると私は思ふのです。それは
 （実際はそんな物をお持ちになりませんけれど、）私から昔あな
 たへお上げた手紙の一部である五六通が一束ひとたばになつた物なの
 です。亡霊は出て来る度に、これを読んで寝ようとお思ひになつ
 てあなたが二階から
 わざ／＼
 態
 「#底本では「／＼」は「／＼」と誤植」とこ
 々
 床の中へ

持つて来ておありになるのを見附けますが、私の生前に束ねられ
た儘の紙捻こよりの結び目は一度もまだ解いた跡がないのです。私の生
前と云ふよりも、私があなたの許もとへ来る前に束ねつかられた儘なので
す。私には全まるで見当の附かない名の書かれた女の手紙が二通と、
私の知つた中のつまらない女の手紙が一通あるのです。私の古手
紙のやうな煙けぶりのやうな色をししないで、それらは皆鮮かな心持のい
ゝ色をした封筒に入つてゐるのです。男のも一通はあるんです。
その知らない女の一通の方ほうの手紙は今日来たのではなく、二三日
前のであつて、今までにもう五六度も読まれた物であると云ふこ
とが私の心には直すぐ解るのです。葉書も二枚あるのです。一枚は
私の妹から瑞樹みづきの機嫌の好いいことを知らせて来た物です。それに

は涙に匂ひが附いて居るので私はまた悲しくて溜らない氣になると云ふのです。一枚は悪筆で、

ワイフを貰ふことなんかを考へ出してはおまへのためによくねえぞ。その外のことならどんなことでも相談に乗つてやらう。心得がある。

こんなことが書いてあるのです。

六

私は阪本さんのために珍しく笑はせられながら、床の間の玩おもち具やだな棚ひを灯の光で見ようとして行くのです。下の棚はがら空になあき

つて居るのです。二段目にも隅はうの方に三郎のだつたがらが一つあるだけなのです。花樹はなきがあの欠けた珈琲こうひ道具も、壊れかかつた物干の玩具おもちゃも持つて行つたのかなどと私は思ふと云ふのです。三段目には蒲団が敷かれて人形の二つが並んで寝て居るのです。その前には木この葉や花の御馳走が供へられてあるのです。一ひとり人前だけです。花樹はなきさんお飲みなさいよと云つてあの茶碗の水は注つがれたのであらうと私は想像をするのです。一番上の人形ばかりの段を見ますと、二つづゝあつたのが皆対つゐをなくして居るのです。瑞樹みづきだけでなく沢山ふたご双生児の欠片かけらが出来たと私は驚きます。私はもう歸らうとしてまた台所はうの方を一寸ちよつと覗のぞきに行く氣になると云ふのです。

また電氣灯を点すと、白つぽくなつた壁際の二段の吊棚が目の前へ現はれて来るのです。私は洋杯の中に入つた三郎の使ひ残した護謨の乳首に先づ目が附きます。丁度二時頃の今時分に毎夜此処へ牛乳を取りに来た、自身でそれをしに来られなくなつた頃から私はもう死を覚期したなど、思ひ出すのです。埃の溜つた棚の向うの隅には懷中鏡が立て、あるのです。洗粉のはみ出した袋なども私は苦々しく思つて眺めるのです。併し私が居たか
 らと云つても、心でくさくさと思ふだけで、表に現れる処では有つても無くても同じ程な寛容な主婦なのであると思ふのです。女中に対する寛容は私の美德でも何でもなかつたのである、私は我身を惜んで、一日でも二日でも女中の居なくなつて下等な労働

をさせられてはならないと思ふ心を離さなかつたからであるなどとも思ふのです。私はふと水口みづぐちの土間に泥の附いた長靴があるのを見るのです。誰たれのであらう、もとよりあなたではない、書斎も玄関も通らなかつたけれど、これを穿いて来たやうな客の寝て居る風はなかつた、盗賊どろぼうのではないかと思つて戸の方ほうを見ても、硝子戸ガラスもその向うの戸もきちんと閉しまつて居るのです。私はそのうち板の間に並んだ女中部屋から烈はげしい男の寢息きこの聞えて来るのに気が附くと云ふのです。二人の女中と一足の長靴と云ふことで私は暫しばらく怖おびえさせられて居ると云ふのです。阪本さんはあんなことを云ふが、この上主人が夜泊よどまりでもするやうになつては困つてしまふではないかなどと思つたと云ふのです。確かそれでおし

まひなのでした。これは書いたのを直ぐ破つてしまつたのでした。前に書いた覚書は何処かへら出て来ることもあるでせう。

私にはまだ書かうと思つて書かないでしまつた遺書もあるのです。あの腎臓炎を煩つた前のことだつたやうに思ひます。あの時分の私は、あなたの妹さんのお艶さんは私の代りになつて、私以上にも子供を可愛がつて教育して下さる方に違ひないと信じ切つて居ました。何時死んでも好いと云ふ位に思つてゐましたから、どうぞ継母に任せないで、生理的の事情から一生独身で居ると云ふことになつて居るお艶さんに私の子をすつかり育て、貰つて下さいとかう書かうと思つて居たのでした。

七

世の中のことは二三年もすれば信じ切つて居た物の中から意外なことを発見するものであるなどと、私は人間全体の智慧の乏しさにこの事を歸して思ふではありません。私一人が悪いのだと思つて居ます。ああした身体からだになつた人には女のやうなヒステリイはないのであらうと云ふ誤解をしたり、既に男性的な辛辣な性質も加つて居ると云ふ觀察をようしなかつたりして、一生に比べて見れば六箇月は僅かなやうなものゝ、その間を私の子の肉体から靈魂までも疑ひを挿はさまずにお艶つやさんに預けて行きゆました。私は自分の子に濟まないことをしたと思つて泣いても泣き足りなく思

ひます。私は欧州に居た間の叔母さんと子供等とに就いて然もそれ程くはしいことは知らないのです。四人程そのことに就いて話してやらうと云つて来た人がありました、私は自分の後うしろくら暗さから（間接に子供を苛めたのは私とあなたなのですから）その人等には曖昧なことを云つて口を閉とぎせました。けれども四つ五つの話から見たくない全体も目に描かれて、悲しいことは同じだけの悲しみを私にさせます。私は留守中のお艶つやさんのなすつた総すべてを決して否定しては居ません。唯だあの人には父に似た愛はあつても母らしい愛に似たものもなかつたのが子供等の不幸だつたのです。巴里パリの下宿で毎日帰りたいたと泣くやうになりましたのは、子供等の心が私に通じたのであると、私はこれまでの経験の中で

このことだけを神秘的なことと思つて居ます。お艶つやさんがお去りになつた翌日、光ひかるが朝のお膳に向ひながらぼんやりとして居ますのを、どうしたかと聞きますと、××の育か児園の生徒は可哀相かあいさうだ、今日けふからは僕達のやうに叔母さんから苛いぢめられるだらうからと云ふのです。私は顔を覆ふて泣きました。でも母かあさん様が生き返つて来たから好かつたではないかと私は云つて慰めました。生き返ることの出来ない処ところにそれが行つて居たのでしたらどうでせう。里から取り返されて、母かあさんなんか厭だよと口癖に云つて居ました佐保子さほこだけを王様のお姫様のやうに大事になすつて、今に佐保子こに兄にいさん様達を踏み躪にじらせますとばかり叔母さんは云つておいでになつたさうです。末の妹に踏み躪にじられるやうな兄達を生みの親

であれば作り上げやうとは思ひませんけれど。私が花樹はなきと瑞樹みづきに
 三枚づゝの洋服を買ひ、佐保子さほこに一枚を宛てて買つて来た程のこ
 とにもお艶つやさんは佐保子さほこを粗末にするとお取りになつて清きよさんの
 家うちへ泣いておいでになつたのです。洋服などは直すぐ小ちくなるので
 すから下へ譲つて行ゆかなければならないではありませんか、さう
 した物質的のことで親の愛の尺度は解るものではありません。丁
 度私の歸つた日に二羽の矮鶏ちやぼの一羽が犬に奪とられて一羽ぼつちに
 なりましたのを、佐保子さほこが昨日きのふまでに變つて他の兄弟たから忌いまれ
 て孤独になつた象徴しるしであるらしいと台所で女中に云つて聞かせた
 りもお艶つやさんはなさいました。何処どこの国に親が歸つて来て孤独に
 なる子がありませうか。母様かあさんの処ところへ行ゆけ行ゆけと云つてはその一

番可愛い佐保子さほこの頭をお打うちになる音を私にお聞かせになりました。そして私の居ない処ところではあの大きな佐保子さほこに出ないあの方かたの乳を吸はせたりもなさるのでした。佐保子さほこが私を敵視するやうになり、この間まで僕婢ぼくひのやうであつた兄弟達が物とも思はなくなつたのに、憤いきどほつてますく横道へ振ねじれて行つたのも、その時には是非もないことだつたのです。

八

ひかる
光を見てお艶つやさんが母と叔母の前で陰陽かげひなたをすると云つて罵しつておいでになつた日には、私は思はずヒステリーに感染した

恥かしい真似をしました。雨の中へ重い光を抱いて出まして、叔母さんが恐いから逃げて行きませうなどと云ひました。私を介抱して下すつたのは春夫さんと菽泉さんでした。そのお二人がお濡しになった靴足袋を乾かしてお返しする時にお艶さんのなすつた丁寧な挨拶を書斎に居て聞きながら、私は病の本家が自分になつたと思つて苦笑しました。光が叔母さんの前ですることが陰なら、母さんの前ですることやはり陰で、そんなにいゝと思ふこともして居ないと私はお艶さんに云ひたかつたのですが、大阪育ちの私はそんな時には駄目なのです。光が善良な子であると云ふことにはあなたも異論がおりにならないでせう。一年に三四度づゝは学校の先生もさう云つて下さいます。藤島先生もさう思

つていらつしやるのです。私の日本を立つ時に敦賀まで来て下す
つた茅野ちのさんも、光ひかるさんは憎まうとしても憎めない性質を持つて
居るから叔母さんも可愛がりなさるでせうと云つて私を安心させ
て下すつたのでしたが、つまりああした中性のやうになつた方は
男から見ても女から見ても想像の出来ない心理の変態があるのだ
らうと思ひます。

最初の覚書にはまだ光ひかるのエプロンにはこんな形がいいとか、股も
ひき引ひきはかうして女中たに裁たせて下さいとか書いて図を引いて置いた
りしましたが、其頃そのころのことを思ひますと光ひかるは大きくなりました。
私等二人のして来た苦勞が今更に哀れなものとも美しいものとも
思はれます。この書物かきものが不用になつて、また何年かの後のちに更に

覚書を作るのであつたなら、この感は一層深いであらうと思ひます。私はもうその時分になつてはこんな物を長々と書くまいとも思ひ、一層書くことが多いであらうとも思はれます。私は併しかしながら話を聞くだけでも眩暈めまひのしさうな光達ひかるの祖父かたの方がなすつたと云ふ子女の厳しい教育に比べて、煙管きせるの雁首がんくびでお撲うちになつた傷痕きずあとが幾十と数へられぬ程あなた方御兄弟がたの頭に残つて居ると云ふやうなことに比べて、寛容をお誇りになるあなたであつても、生きた光達ひかるをお託しすることの不安さは何にも譬たとへられない程に思つて居るのです。あなたのお飼ひになる小鳥の籠くわがへを覆すやうなことがあつても私の子は親の家を逐おはれるでせう。あなたが仏蘭西フランスからお持ち帰りになつた陶器の一つに傷を附けた時、私の

子は旧もとに戻せと云ふことを幾百度あなたから求められたでせう。

私は此処ここまで書いて来まして非常に気が昂あがつて来しました。母を持

たない我子は孤児になる方がましなのではなからうかと思ひます。

さつき

先刻御一緒に飲んだココアのせいなのでせうか。私には隣国の某

たいこう

太后が養子の帝王に下した最後の手段を幻影に見て居ます。け

れど私はそれを決して実行致しません。もとよりこの覚書を見て

頂かうと思つて居ます。殊ことに私は白髪しらがを掻き垂れて登場して来よ

うとするあなたの初恋の女のために、あなたと一緒に葬られやう

としたと思はれては厭ですから。

妙な調子になつて来ました。

九

私は光ひかるのためにあのことも書いて置ませう。これは一昨年をと、しの歳暮せいぼのことでした。ある日の午後学校から帰りました茂しげるが護謄ごむまり鞆たもを欲ほしいと頼むものですから、私は光ひかるに買つて来て遣ることを命じたのでした。簡単な買物として私は光ひかるの経験にとも思つて出したのでした。清きよしさんの家うちの譲ゆづるさんにも頼んで一緒に行つて貰つたのです。麴町あがなの通りで購まりはれた鞆すは直しげるぐ茂の手へ渡されたのです。茂しげるは嬉しげるしさに元園町もとそのちやうの辺りでは鞆まりを上へ放り上げながら歩いて居たのです。どうした拍子にか鞆まりはあの阪さかの中途にある米何こめなにとか云ふ邸やしきの門の中へ落ちたのださうです。光ひかる自身の物であれば

あの恥^{はづか}しがる子がどうして知らない家へ拾^{はひ}ひに入りませう、また貧しいと云つても自分の親には十や二十の鞠^{まり}を買ふだけの力はあると信じて居ますから、もう一度歸つてから麴^{とほり}町の通^ゆまで行けばいいと諦^{だけ}めた丈で歸るのだつたのです。今の今迄^{よろこ}悦んで居た弟の淋しい泣顔を見てはじつとして居られないやうな気がしたのでせう、然^{しか}もまだ二人だけであつたなら手を取り合つて歸つて来たかも知れませんが、従弟^{いとこ}の心も自分と同じやうに茂^{しげる}のために傷^{いた}められて居るのであらうと見ては、一番年上の自分が勇氣を出して見なければならぬと思つたのでせう、光^{ひかる}はその米^{こめ}何^{なに}の門を五六歩^{はひ}入つて行つたのださうです。それだけで十一年の間玉^{たま}のやうに私の思つて来た子は無名の富豪の僕^{ぼく}に罵^{のの}られたのです。辱^{はづかし}められ

たのです。^{ひかる}光は多くを云ひませんし、私も尋ねないでそれで済んだのですが、私の心は長い間その事から離れませんでした。僕を^{ぼく}老人として赤ら顔の酒臭い男を思つて見たり、若くて背中の曲がつた男かと思つて見たり、車夫^{しやふ}姿をした男かと思つて見たり、我子を罵つた言葉は越後訛か、奥州訛かと考へて見たり、門内の物は塵一本でも自家の所有物であると、ねちねちと物を言ふ半商人、半書生が憎まれたりもしました。人の子を瓦^{はし}の片のやうに思つて居るそんな人間を養つて置く広い邸^{やしき}や無用な塀の多い街を私は我子を置いて死^うに得^{ところ}る処とはよう思ひません。ウイインの王宮の庭は平民達の通路になつて居るではありませんか。であるからヨセフ老帝は薄命だと云はれるのである、自身の居る窓の下に旅人の

煙草たばこの吸殻あきを捨てさせるなどとは憐むべきである、絶東ぜつとうの米こめに何だけの威ゐをもよう張らないのであると米こめ何は思つて居るか
も知れません。私は米こめ何なにを無名のひとと書きましたが、あの海軍
の収賄問題のやかましい頃に贈賄者として検挙される筈はずであるとか、家宅搜索を受けたとか、度々たび／＼米こめ何なにの名は新聞に伝へられましたから、そんな意味に於おいての名はある人なのでせう。

十

光ひかるはどう大人にして好いのでせう。親は二人あると思つてもこのことは考へなければならぬのです。翅はねを持たないだけの天使

は人間界の罪惡を知りもしなければ、それに抵抗する準備もありません。私は心細くて心細くてなりません。光はまだ子は母より生れるものとより他^たを知りません。同じ家に居るからと云つて子に父の遺伝があるなど、云ふことは不思議なことではないかと、この間も茂^{しげる}に語つて居るのを聞きました。それは結婚と云ふことがあるからであらうと思ふがと、斟^{しん}酌^{しゃく}をして居るやうな返事のしかたを弟はして居ました。茂^{しげる}の懷疑は光^{ひかる}のそれに比べられない程に根底が出来て居るらしいのです。弟は両親が兄に対する細心な心遣ひを知つて居ますから、自分は自分、兄は兄として別々にして置かうと思つて居るらしいのです。光^{ひかる}はそんなのですから、荒々しくて優しい趣味の乏しく思はれるやうな男の友より女の友

と遊ぶのを悦よろこんで居ます。綺麗だから欲しいと云ふものですから、私は叱ることもようぜずに、花樹はなきや瑞樹みづきに遣るやうな小切れを光ひかるにも分けて与へてあるのです。色糸いろいとなども持つて居ます。平生ふだんはそれを出して遊ぼうとはしません、玩具おもちゃ柵の一番下にある黒い箱がそれです。女の友達の来て居る時に刺繡ぬひこしらを拵へて遣つたり、人形を作つたりしてやることがあるのです。女も交まじつて遊ぶ学校へ入つて居たなら、光ひかるも運動場の傍観者ではなかつたかも知れません。このことは性の別がはつきりと意識される日に直ることであらうと思ひます。光ひかるはまた男性的でないものではありません。あの大様おほやうな生々いきくとした線かで描く絵を見て下さい、光ひかるの書いて居る日記を見て下さい、光ひかるは母親うらやの羨うらやんで好い男性です。私が光ひかる

に危あやぶみますのは異性に最も近い所で開く性の目めざめ覚です。この間私は電車が来ないために或停留場に二十分余りも立つて待つて居ましたが、丁度祭まつりび日であつたその夕方に、綺麗よそほに装はれた街の幼い男女なんによは並木の間あひだ々々で鬼ごっこや何やと幾いくだん団にもなつて遊んで居ました。その子等の絶えずくちずさみ口占くちずさみのやうにして云つて居ますことは、二字三字活字になつて本の中に交つても発売禁止を免れることの出来ないやうな言語なのです。そればかりなのです。恐おそろしい都、悲しい都、早熟な人間の居る南洋の何やら島しまの子も五つ六つで斯かうなのであらうかと、私は青ざめて立つて居ました。性欲教育と云ふことはその子等の親達には考へるべき問題でないでせうが、私等のためには重大なことなのです。よく考へて

遣つて下さいな。

ひかる

光のことを思つて居ますうちに、私の心は四郎のことを少し云はないでは居られないやうになりました。私は四郎の生立おひたちをよう見ないのでせうか。五つ六つ、七八な、やつで母親を亡くした人を見ては、光ひかるもあなるのではあるまいかと運命を恐れながら漸やうやく十三歳うさんに迄なるのを見ました。四郎は二歳ふたつではありませんか、光と同じ顔をした同じやうな性質を持つて生れた四郎を、私はどうかするともう十三歳じうさんに迄してあると云ふやうな誤つた安心を持つて見て居なかつたでせうか。四郎が二歳ふたつであることを思ふと私は死なれない、死にともない。

雑記帳は唯ただだこればかりでもう白い処ところがなくなりました。後あとを

書いて置くかどうか、よく解りません。

(完)

青空文庫情報

底本：「読売新聞」読売新聞社

1914（大正3）年10月11日～23日（全10回連載）

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。（旧字を新字にあらためましたが、旧仮名づかいには変更を加えませんでした。総ルビをパラルビにあらためました。）

※「井」は「ウイ」、「こと」の変体仮名は「こと」、二の字点は「ゝ」にそれぞれ書き換えました。（一般には、片仮名用の繰返し記号として用いられる「ゝ」が、底本では平仮名のルビに

も使用されていることを踏まえ、二の字点の代替には「、」を用いました。）

※底本は「入る」に「《はい》る」とルビを振っていましたが、「《はひ》る」としました。

※本作品中には、身体的・精神的資質、職業、地域、階層、民族などに関する不適切な表現が見られます。しかし、作品の時代背景と価値、加えて、作者の抱えた限界を読者自身が認識することの意義を考慮し、底本のままとしました。（青空文庫）

入力：武田秀男

校正：mayu

2001年12月6日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

遺書

與謝野晶子

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>